

遺跡でたどる 袋井のあゆみ



ハイエスト

原始・古代～江戸時代の巻



袋井市教育委員会

遺跡でたどる袋井のあゆみ

山田原遺跡

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良平安

鎌倉室町

江戸

▲山田原遺跡(約15,000年前)

袋井市内最古の遺跡は、磐田原台地の上、三川地区山田の山田原遺跡で、今からおよそ1万5千年前にさかのぼるムラの跡が見つっています。この時代は、最後の氷河期の終わり頃で、旧石器時代や先土器時代・無土器時代などと呼ばれ、人々は狩り(狩猟)や根菜類・果実などを集める(採集)によって食べるものを手に入れ、森林資源に支えられた豊かな生活を送っていました。

狩りの道具は主に木や石で作られ、けもの角や骨なども使われていました。山田原遺跡は1983(昭和58)年の発掘調査によって、狩りの道具としての石器とともに、調理のために使ったと考えられる焼けた石が集まる場所、火を焚いた跡、石器を作ったときに飛び散った破片などが発見されました。彼らが暮らした家の痕跡は見つかりませんが、木材を組み木にして草や皮で覆ったテントのような家が建っていてもおかしくない石の破片が無い場所も見つっています。山田原遺跡の周辺には数多くの同時代の遺跡が発見されているので、磐田原台地の上では多くの人々が暮らしていたと考えられます。出土した石の道具は、樹木の加工・処理に有利な頑丈なタイプの石器よりも、狩猟具に使いそうな先の尖った石器や壊れ易いが鋭い刃のある石器ばかりのため、山田原遺跡で暮らしていた人々は、季節ごとに食料となる動物を追って、キャンプ生活をしながら移動を繰り返していたようです。



▲発掘調査中の山田原遺跡



▲発見された狩りの道具(石器)

長者平遺跡・大畑遺跡

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良平安

鎌倉室町

江戸

▲長者平遺跡・大畑遺跡(約5,000年前)

袋井市域で見つかった縄文集落の跡には南地区豊沢の長者平遺跡と笠原地区岡崎の大畑遺跡で、ともに小笠山丘陵の西南山麓に位置しています。

長者平遺跡は、1978(昭和53)年以来続いた発掘調査によって、今から約5千年前にムラが営まれ、4千年前には静岡県西部でも有数の大集落に発展しました。しかし、3千5百年前に突然人々がなくなり、廃絶したことがわかりました。気温が低下したことによって食料を求め移動したと推定しています。



縄文土器(約5000年前)



縄文土器(約3000年前・約4500年前)



▲ 調査中の母子のお墓

長者平のムラは、住居や墓地、祭り場、広場、集会所などから成り立ち、発見された6棟の竪穴住居跡はすべて円形でした。住居は2棟がセットとなって、広場を囲むようにして、段丘の縁に分布していました。

大畑遺跡からは、16棟分の住居跡と東海地方最東端の貝塚が見つかっています。コイやウナギなどの内陸魚の他に、エイやニシン、ボラ、スズキ、クロダイ、カレイ、マゴロなどの沿岸や外洋に棲む魚の骨も含まれていました。

お墓からは手足を折り曲げて葬った屈葬人骨や、竪穴住居の隅に埋蔵されていた犬も見つかっています。



▲ 長者平遺跡の竪穴住居跡

鶴松徳光遺跡・愛野向山遺跡

旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良平安 鎌倉室町 江戸

▲ 鶴松徳光遺跡・愛野向山遺跡(約2,000年前)



▲ 鶴松遺跡の住居跡



▲ 鶴松遺跡出土の弥生土器

紀元前3世紀ころ北部九州に稲作が伝えられると、袋井市域でも今までは生活の様子がしだいに変わり、ムラは沖積地に面した低い丘陵や台地の上に営まれるようになります。太田川・原野谷川流域には稲作にとって都合の良い湿地が広がり、羽を直播きする初期の水田が開かれたと考えられますが、生産性は低く、ムラの数も限られていたようです。

最初のころの木製農具には鉄製工具の加工痕が見られるだけでしたが、鉄や鋼先に鉄製の刃が付けられるようになると、乾いた土地の耕作もできるようになり、2、3世紀ころには竪穴住居の数も飛躍的に増え、灌漑用の水路を思わせる溝がたくさん掘られ、鶴松のムラは大きくなっていったと考えられます。

耕地が拡大すると、人口も急激に増加し、小河川の流域にまでムラが営まれるようになります。肥沃な水田地帯をひかえた太田川・原野谷川流域には、多くの人々が集まり、複数のムラが協力して水稲耕作を行うようになりました。それは地域的な指導者を生み出し、新しい社会秩序の芽生えさせました。

また、この頃には稲作に向きない丘陵の斜面などにムラが営まれるようになることから、『三国志』魏書東夷伝に“倭国大乱”と記されたような、ムラどうしの争いがしばしば起きていたのかもしれません。



▲ 小高い丘の上に営まれたムラ跡(愛野向山遺跡)

弥生時代の遺跡には、北地区鶴松の鶴松遺跡や南地区愛野の愛野向山遺跡のようなムラの跡のほか、南地区の団子塚遺跡群や掛之上遺跡などで墓地も数多く発見されています。この時代の墓は、土坑墓や土器棺墓、わずかに盛土を伴う周溝墓などが見られます。埋葬施設は今井地区徳光の徳光遺跡で発見されたような木の棺だったと推定されます。



愛野向山遺跡出土 小銅鐔(高さ7.5cm)



▲ 団子塚遺跡の方形周溝墓群

古新田遺跡・坂尻遺跡

旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良平安 鎌倉室町 江戸

▲ 古新田遺跡・坂尻遺跡(約1500年前)



▲ 古新田遺跡の豪族館跡



▲ 古墳時代後期6世紀のムラ跡(坂尻遺跡)

弥生時代の終わり頃、河川流域の微高地に営まれていた複数の集落をとりまとめ、指導していた有力者は、さらに広い範囲で結びつき、4世紀には太田川・原野谷川流域全体におよぶ地域的な統合をなしとげたと考えられます。前方後円墳はこうした地域の首長(豪族)の墓として造られるようになり、近畿地方の古墳と同じ形で造られています。

5世紀には鍬や鋤先につける鉄製の刃がU字形に変わり、より深く効率的に耕せるようになりました。この頃には鉄の量産が可能となり、鉄製農具が普及して水

田や畑の開発が進みました。市内でも周辺のムラを従えた大きなクニが現れ5世紀には浅羽東地区の古新田遺跡、6世紀には東地区で坂尻遺跡で大規模なムラが姿を現しました。

坂尻遺跡からは、7世紀中頃の住居跡が噴砂に引き裂かれていました。8世紀初めになると、噴砂の上に新しい建物群が建築されるので、684年頃に東海地域も激しく揺れたことがわかります。

五ヶ山B2号墳・石ノ形古墳

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良平安

鎌倉室町

江戸

▲五ヶ山B2号墳・石ノ形古墳(約1,500年前)

浅湾東地区の五ヶ山B2号墳は、5世紀前半に遠州灘を見下ろす小笠山丘陵の尾根に築かれた静岡県最大の方墳(33×28m、高さ4.7m以上)と呼ばれる古墳で、墳丘は2段に造られ、墳旧の表面には葺石が敷かれ、埴輪が並べられていました。

埋葬施設からは、県内で初めて甲冑、革製鉾柄、革桶などの漆塗り製品、種類の豊富な鉄製武器類・農工具が一そろって出土しました。

〔静岡県指定文化財(平成15年3月12日指定)〕



五ヶ山B2号墳に副葬された鉄製短甲

東地区北原川の石ノ形古墳は、原野谷川右岸の丘の上に築かれた直径27m、高さ3mの円形に西側へ出っ張りを持った帆立貝のようなかたちの古墳です。5世紀後半に造られた古墳で、埋葬施設は2箇所発見されました。短甲とともに馬具、鏡、大刀、剣など、数多くの副葬品が発見されました。



五ヶ山B2号墳に副葬された農具と武器類



石ノ形古墳に副葬された鉄製短甲

大門大塚古墳・衛門坂古窯跡

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良平安

鎌倉室町

江戸

▲大門大塚古墳・衛門坂古窯跡(約1,400年前)

南地区大門の大門大塚古墳はJR袋井駅近くの段丘上に築かれた6世紀中頃の円墳(径30m、高さ4.5m)で、古墳の周囲には空堀を巡らしています。1883(明治16)年に地元住民の手によって第1回目の発掘が行われました。埋葬施設は横穴式石室と見られ、埋葬者は首長クラスの中でも最有力者のお墓と考えられます。〔静岡県指定文化財(平成5年5月22日指定)〕

出土品には当時の最新技法で作られた馬具が含まれています。また、市内には埴輪や須恵器を生産していた窯跡が笠原地区岡崎から発見され、衛門坂古窯跡と呼ばれています。



▲ 大門大塚古墳の姿と埋葬施設



大門大塚古墳の副葬品



衛門坂古窯跡出土の埴輪や須恵器片

掛之上遺跡・坂尻遺跡

旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良平安 鎌倉室町 江戸

掛之上遺跡・坂尻遺跡(約1,200年前) ▲

南地区高尾町の掛之上遺跡は、JR袋井駅北側の段丘上で、水運に利用されたと想像される原野谷川と陸運に使われた古代の東海道が北側に存在し、交通の要衝としての郡役所が置かれる条件が整った場所に営まれた遺跡です。JR東海道線で分断されていますが、南側に広がる大門遺跡とは、連続した遺跡だったと考えられます。

これまでの調査によって、口の字形に倉庫群が並び中央部の広場を持つ正倉と考えられる施設が発見されています。倉庫群の中には、全長が22mにもなる双倉が含まれており、文字資料の発見はありませんが、山名郡の役所である可能性があります。



▲ 坂尻遺跡の倉庫群跡



▲ 掛之上遺跡の双倉跡と復元図



坂尻遺跡出土の墨雲土器

東地区国本の坂尻遺跡は、原野谷川右岸にあたる標高17mほどの自然堤防上の微高地に立地しています。そこは原野谷川(水運)と、古代の東海道と同じ場所にあったと推定される近世の東海道(陸運)が交差する交通の要衝で、古代の郡役所が立地するための条件の整った場所です。これまでの調査によって、「佐野厨家」や「日根駅家」などの墨雲土器や和同開珎などが発見され、佐野郡家(郡役所)と日根駅家(街道施設)が併設されていた地方官衙遺跡と推定されています。

浅羽館跡

旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良平安 鎌倉室町 江戸

浅羽館跡(約900年前) ▲

浅羽北地区の浅羽館跡は、平安時代後期(900年前)に成立した浅羽荘の現地荘官、浅羽荘司の館と伝えられ、旧静岡鉄道駿遠線の芝駅跡周辺に土壁が残り、荘司の子孫と伝える浅羽氏の敷地内には現在もその一部が残されています。2000(平成12)年に行われた調査では、平安時代後期～鎌倉時代で、浅羽宗信の館と見られる50m四方の方形居館の堀が発見されました。東側の土壁の調査などから、東西約100m、南北130mの範囲に近年まで残されていた土壁に囲まれた規模へ南北朝に柴氏が拡張したと推定されます。



▲ 浅羽荘司の館跡の堀跡

十二所居館跡

旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良平安 鎌倉室町 江戸

十二所居館跡(約700年前) ▲

菅洞宗の古刹、心宗院が建つ十二所居館跡は、平安時代後期に成立した熊野山領の山名荘の南端、諸井郷に立地しています。心宗院境内には明治以前には熊野十二所権現の祠も祀られていました。

館跡は、山名郡諸井郷関係の施設として始まり、13世紀中頃には土塁の内側と外側に堀が廻る東西85m、南北120mの本格的な中世居館になります。15世紀後半からは駿河伊達氏が駿河国度郡から移り住んだと考えられます。駿河伊達氏は馬伏塚城の小笠原氏の与力となり、小笠原氏が武田氏の味方となると伊達氏は勝頼に降り、館を離れたと考えられます。1568(永禄11)年には徳川家康に反旗を翻した堀越氏延らはこの館に盤居させたと見られます。その後、家康は高天神城を攻めるため、この館を陣城として活用するため、酒井忠次によって再整備されたと考えられます。



十二所居館跡から出土した食器と調理具



駿河伊達氏の館と見られる十二所居館跡 ▲

馬伏塚城跡

旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良平安 鎌倉室町 江戸

馬伏塚城跡(約600年前) ▲

浅羽北地区浅名の馬伏塚城跡は、掛川市土方の高天神城跡とともに静岡県西部を代表する戦国時代の城跡で、今川氏時代には要の城として、守将に重臣の小笠原氏が置かれました。了教寺の付近の居館と北側の詰城(呑吉山)で構成されていたと推定されています。

1569(永禄12)年に徳川家康が静岡県西部に侵攻した後、小笠原氏は徳川氏の傘下に入ります。静岡県中部から西部へ侵攻した武田信玄との間で、支配権をめぐって武力衝突になり、1574(天正2)年、武田勝頼の攻撃で高天神城が武田氏の手に落ちると、城主小笠原長忠は武田氏に従うことになり、馬伏塚城も武田の城となります。しかし、家康は時を経ずに馬伏塚城を取り返し、大須賀康高に命じて高天神城奪還の前線基地として大改造を加えました。城は大規模な土塁を廻らす本格的戦国の城となりました。



▲ 馬伏塚城復元図



▲ 南郭群から発見された建物跡

久野城址

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良平安

鎌倉室町

江戸

久野城址(約500年前) ▲

久野城は、蔵王城とも呼ばれ、1494(明応3)年の駿河今川氏の遠江侵攻時に築城されたと考えられています。城址は南へ伸びる丘陵の先端部を利用して築かれ、曲輪・井戸・土塁・堀切などの旧形状が良く残されています。

築城者として知られる久野宗隆より後、代々久野氏が城主を歴任していましたが、1590(天正18)年の徳川家康の関東移封に伴って、久野宗能が下総佐倉(千葉県佐倉市)へ移ると、豊臣秀吉の家臣、松下之綱が入城し、瓦葺の建物が建つ本格的な戦国時代風(織豊系)の城郭に改造されました。関ヶ原の戦いののち、1603(慶長8)年に松下周綱が常陸小張(茨城県つくばみらい市)へ転封し、その後、再び久野宗能が城主にもどりますが、1619(元和5)年に宗能の跡を継いだ久野宗成が家康の十男、徳川頼宣に従い伊勢田丸(三重県度会郡玉城町)へ移封すると、北条氏重が下野富田(栃木県栃木市)から移ってきました。大坂の役(1614・1614)へ参戦や武家諸法度(元和令)の発布など時代は大きく動き、久野城は城塞部分を城割りしたと考えられます。氏重が1640(慶長17)年に下総関宿(千葉県野田市)へ転封となると城は、横須賀藩(掛川市横須賀)が管理することとなり、1644(正保元)年に新たな城主を迎えることなく廃城となりました。



▲ 久野城址全体図



久野城址から出土した戦国時代の瓦・破瓦・鬼瓦

袋井宿跡

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良平安

鎌倉室町

江戸

袋井宿跡(約400年前) ▲



▲ 東本陣と見られる建物跡



▲ 土蔵と考えられる建物跡

袋井宿は旧東海道の宿場で、江戸から数えても、京から数えても27番目の「どまん中」の宿です。他の宿場より遅れて1616(元和2)年に駿府城主、徳川頼宣の重臣等の署名による開設の命令書が発給され正式に東海道の宿場となりました。

宿場には、武士や貴族らが宿泊するための本陣が設けられていました。袋井宿には三軒の本陣があり、もっとも大きな東本陣は、門構えの玄関や上段の間を持つ書院、家臣が宿泊する座敷などの間取をもつ建物で、1618(元和4)年から1634(寛永11)年までの宿泊者の名前を記した宿帳が残されています。これまでの調査で、本陣家の居住空間からは安政の地震での火災の跡や陶磁器類、播鉢など食器と調理具が発見されました。